

笹川保健財団 研究助成
助成番号：2021A-003

(西暦) 2022年 2月 24日

公益財団法人 笹川保健財団
会長 喜多悦子 殿

2021年度笹川保健財団研究助成
研究報告書

標記について、下記の通り研究報告書を添付し提出いたします。

記

研究課題

婦人科がんサバイバーの化学療法誘発性末梢神経障害に対するあん摩マッサージの最適プロトコルの
作成とその効果の検討

所属機関・職名 筑波技術大学保健科学部・教授

氏名 殿山希

報告書

今年度、せっかく研究助成を受けたにも関わらず、以下の理由により研究が全くできませんでした。よって、研究費を返金いたします。

1. 先行研究の投稿に失敗しました

本研究の採択前に、先行研究として、がんサバイバー（2名）に対するあん摩マッサージの介入を行っており、それを英文誌に投稿しておりました。しかし、Alternative and Complementary Medicine (CAM)関連のインパクトファクターが高い雑誌の多くは、case report を受け入れておらず、受け入れ可能とされた雑誌でも珍しいケース報告しか受理されない状況でした。

ランダム化比較試験に進めて行きたかったため、予備研究を論文投稿することを優先して取り組みましたが、未だ結果が出ていない状況です。

2. 研究費の支出をどうしたらよいかの問題

投稿がうまく行かないとはいえ、試験を開始させようと考えました。本研究は隣接する他大学病院の共同研究者（医師）の臨床現場で研究参加者をリクルートするつもりでした。他大学病院での研究参加公募→私の所属での介入試験、という研究デザインでした。私共はあん摩マッサージ指圧師免許で施術を行いますので、研究参加ということであれば、私の職場の医療センター（医師の所属する場）でなくてもあん摩マッサージ施術を行う研究は可能です。また、今までも私の研究は鍼灸あん摩研究室で施術を行って研究したものでした。しかし、このたび、神経伝導速度試験が必須でしたので、医療センターの患者として研究参加者を受け入れようと思いました。実際、貴財団からの助成金は、被検者の神経伝導速度試験にかかる経費として計上したものです。

しかし、大学事務から「医療センターの患者として神経伝導速度試験を行うのだからその経費は受益者が負担すべき」と言われました。それはそうかもしれませんが、こちらで経費を負担しないと、研究の脱落等生じる可能性が考えられ、研究デザインが作れなくなってしまいました。

3. 研究の指標に問題があるかと考えました

先行研究の対象2名は、もう約2年になるのですが毎週1回のあん摩マッサージ施術に欠かさず通い続けています（治療費は1回3,300円の自己負担であるにも関わらず）。化学療法誘発性末梢神経障害の痛みの強さがずいぶん低下している、痛みの範囲が狭くなっていると喜んでます。よって、治療を継続させる意味はあると確信しています。しかし、客観的評価としての神経伝導速度試験によると、振幅がまだ低く、神経変性が改善されていないことを示唆するものです。CAMの研究では、患者の自己評価は高いが、ポジティブな客観データが少ないということが国際的に言われています(Field T 2007, 2014, 2016, 2019の

massage therapy research review から)。そこで客観的評価として何を設定すべきかと悩んでいるうちに時間が過ぎてしまいました。

先ほど医師とこの点について話合いましたが、医師から「患者は医師にはできない慢性期の QOL 改善に CAM に期待している」と言われました。ならば、もともとの研究デザインでも十分に研究する価値はあったのだと気づきました。

来年度以降に研究助成にトライして、再度チャレンジしたいと思います。

4. 大学・専攻における問題点

コロナ感染蔓延で大学教員の仕事負担増加は世界中同じですが、対面を必要とする鍼灸あん摩マッサージ学を教育する私の職場では、1 学期に 2 学期授業を前倒しにして、インフルエンザが流行り始める 11 月までに対面授業を終わらせて、後はオンラインの座学に切り替えるという方針でした。よって、11 月までは毎日授業が多く、初期研究に費やす時間が十分にとれませんでした。

その上、慢性的な入学志願者減少が続いていることから、大学に連携課程を設置するための準備・保健学科の改組・先行の魅力作りの発信を大学中枢から命じられました。毎年何かしらは言われては来ましたが、ここまで具体的な話は初めてでした。特に、今年度になってから、学生募集のプロジェクトとして何かしなければならなくなり、急に新しい取り組みとして、専攻主催シンポジウムを開催することになりました。私共が専攻長であるため、これに研究に費やすはずの時間と労力が相当奪われることになってしまいました。

来年度は専攻長の任期が終わることから研究に邁進できると考えます。

再度、研究費助成を受けられるよう努力いたします。

お手数をおかけしてすみませんでした。